

豊明希望チャペル礼拝

2023/9/24

「誰が私を救い出してくださるか」

ローマ人への手紙 7：14～25

今日の箇所は、ローマ人への手紙の中では、特に自分自身の個人的な思いが強く出ている箇所です。有名であり、共感をもって読まれている方々もクリスチャンのなかには多いのではないのでしょうか。

「7:24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と、自分自身の情けなさ、無力を嘆くパウロの姿は、弱い私たちの歩みに共感をよぶものです。

パウロ先生も、こんなに罪と戦っていた、そして、勝てなかったとさえ言っている・・・まして、私はと、共感するのです。

そして、今日の箇所では、一気に、パウロは、その答えを、天からの啓示のように、天啓の如く、御言葉を、いわば受け取るのです。

「7:24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」

こう続けるのです。

「7:25 私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します・・・」

答えは、すでに出ている。感謝だと。また、だからこそ、答えがあるからこそ、ここまで、自分自身の無力に絶望できたのだと言えるのです。

この言葉を最初に確認しておきたいのです。

「クリスチャンにとって、絶望は絶望ではない。」ということです。

クリスチャンにとって絶望はないと言いたところですが、実際には、このパウロのように、絶望することもあるのです。しかし、その絶望は、必ず、救いの入口なのです。希望の入口なのです。クリスチャンにとって**絶望は希望の入口**だとしるべきだということです。

すでに今日の箇所の結論から見ました。

パウロは、この4章の律法の問題を扱うのですが、前回まで見てきたとおりです。十戒に代表されるように、殺してはならない、ウソをついてはならないと、その律法は、正しく、言うまでもなく良いものです。むしろ、命がけで守らねばならない神の命令です。しかし、一方で、人間は律法に従いきれないと言うことが、旧約聖書、すなわち、人間の記録を見るに、証明されています。

よいもののはずの律法が、かえって、人間が罪を犯すきっかけさえ作ってしまう。やるなどと言われるほど、やってみたくなくなるというように・・・それほど、罪は深く、やっかいだということです。それは、こちらが死ぬまで、私たちは、この律法から解放されないというほどに、強固でやっかいです。しかし、キリストが私たちに代わって十字架で死んで下さったゆえに、私たちも、律法に死に、もはや、律法に縛られないあ

らたな命をいただいているという訳です。

そこで、パウロはあらためて、自分自身の個人的な、そして具体的な罪との戦いを思い出しているのです。それが、パウロにとって、なんであったのか、その中身までは明らかにされていませんが、それは、私たちにも経験しているような、共感できる内容であります。

パウロが、自分自身の罪、あるいは誘惑との戦いを告白してくださったので、私もいささか告白しましょうか・・・公にできるものだけ告白します。

私が牧師になりたての頃に、最初に説教箇所としてとりあげたのが、ここローマ人の手紙ですが、当時のこのローマ人への手紙の聖書の注解書に赤い字で、いっぱい書



き込みがありました。

そこには、赤字で、「自転車」と、なぞの言葉があるのです。そして、その横には、「物欲」と書いてありました。当時、私は、競技用のような自転車を買いました。健康のためにと。でもパウロのごとく自分の心の扉をたたいて、奥深くを開けてみたのです。そして、考えていたのです・・・そして、気づいていました。健康用にそんな高い自転車はいらない。そこに、いいわけに隠された心の奥を覗いていました。そして、自分なりに、こう指摘したのです。「物欲」と。注解書には、解決策も書いてありました。「証しのために」そして、もう一言。「競技大会に出る。」たぶん・・・物欲を証しに変えちゃおうという思惑（おもわく）だなと、まあ、自分のことですから、一番、よくわかる。29歳の桂司君の、そういうごまかしだと思いました。

その後何をしたか・・・自転車用の競技用の靴を買い、しかも二足。ペダルをそれように換え。それも買い。ヘルメットを買って。ウェアまでそろえた。その当時、アメリカの牧師が、自転車の競技に出て、それで優勝したりして、証しをしているのを本で読んだことを思い出しました・・・おそらくその記事に触発されたと思う。でも、

罪を証しに変えようという浅はかさです。結果は、物欲に物欲を加えただけでした・・・近くの山の坂を何度も登ったりして体を鍛えたのですが・・・程なくして、挫折したことは、言うまでもないことです。

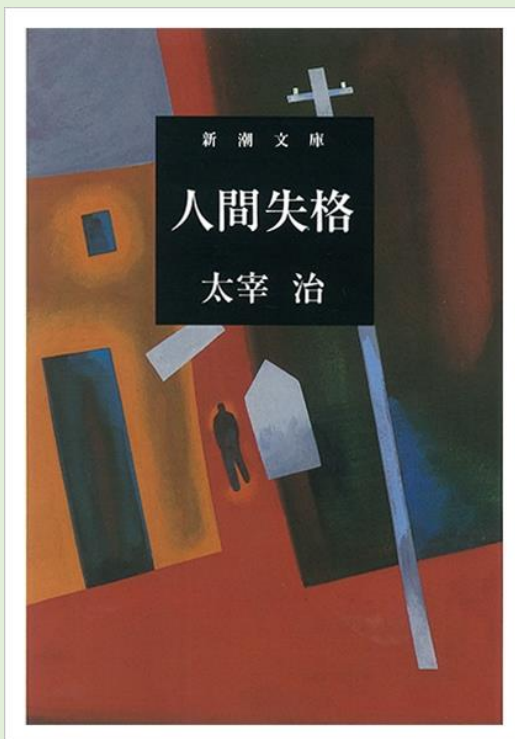
全部が罪だとはいいいませんが・・・いつもいいわけ出来ない自分の中の罪や弱さを発見するのです。

あえて、比較するものではありませんが、太宰治の人間失格という小説を思います。

ちなみに、これは彼の読んでいた聖書です。私ではありませんが、書き込みがあります。ここには、奥さんとのことが書いてあるそうです・・・

彼が『人間失格』『第三の手記』の中でこんなことを言っています。

「自分は、犬よりも猫よりも劣等な動物なのだ。蟾蜍(ひきがえる)。のそのそ動いているだけだ。・・・いまはもう自分は、罪人どころではなく、狂人でした。・・・神に問う。無抵抗は罪なりや？人間、失格。もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。」



彼は、この小説の中で、主人公が自分自身の心の内を内省していく様子を描いていますが、思いついたのは、それは、自分のうちにあるどうしようもない、欲望であり罪であり、そして、絶望であったということでしょうか。

パウロ、(比較にならないがあえて・・・) 私、太宰治と並べてみましたが、自分の心を内省するとき、思い至るのは、いずれも、罪があり、そして、それを克服できない絶望の中にある自分であります。

あえて、みなさんのことを言いませんが、みなさんも、等しく、こういう結論に至るのではないのでしょうか。

いや、最初に言いましたように、私たちは、あえて、こういう結論に至らねばなら

ないのです。すなわち、私たちは絶望であるということです。

キリスト教の景教に影響されたとも言われる、親鸞が、「自分は「悪人」であると目覚させられた者こそ、阿弥陀仏の救済の対象であることを知りえる」すなわち、「悪人正機」なりと悟らなくても、私は、すべての人が、多かれ少なかれ、絶望の中にあるし、それを恐れて生きているのだと思っています。というより、聖書にそう書いてあるからです(ローマ人への手紙1:18～)。

今日の箇所は、あえて、先週のヨハネの福音書のように、御言葉を追いませんでした。

というのは、ある意味、支離滅裂だからです。詳しくは、解説しませんが、文章が起承転結とか、1, 2, 3 とかの順で書かれているとかそういうことがなく、ああでもない、こうでもない、自分が悪かったと親の前に出た子供が、それが言い訳であれ、謝罪であれ、たいていこういう風に言うだろうなというような、言っていることが繰り返しとなります。

私という人間には、二人の人間が同居しているといえます。

一人は、律法に従おうとするパウロ。一人は、律法に逆らっている生きるパウロ。二人が同居し、しかし、二人とも、この正真正銘のパウロなのだと思います。

今日の箇所、16節から21節まで、一応、読みますが・・・今、私が、言ったことが繰り返されています。

「7:16・・・7:21 そういうわけで、善を行いたいと願っている、その私に悪が存在するという原理を、私は見出します。」

私という人間には、二人の人間が同居しているといえます。一人は、律法に従おうとするパウロ。一人は、律法に逆らっている生きるパウロ。

必死に自分自身、内省し、探求していますが、このように分析できても、いっこうに、その分析から解決は見えてこないのです。そのことが、手に取るようにわかる箇所です。

パウロさん、そろそろ、泣き始めていますか？と問いたくなるような、絶望状態です。

僕は、やろうとしたんだよ、でも、やれなかったんだ。ダメなんだ。でもね、やろうしたんだ、でもダメだったんだ、それで、もう一度チャレンジしたけど、ダメなんだよね・・・いったいどうなっているんだろうね・・・と。

彼は、ついに観念します。どう観念するかというと、僕は絶望だと観念するのです。

「7:23 私のからだには異なる律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いを挑み、私を、からだにある罪の律法のうちにとりこにしていることが分かるのです。7:24 私は本当にみじめな人間です・・・」

ついに彼は、絶望に到達したと言うことです。

しかし、何の断りもなく、そう、まるで、天から声が突然聞こえてきたかのように、何の脈略もなく、答えが、そう言わば、降りてきたのです。

「7:24・・・だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。7:25 私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。こうして、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」

「私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。」この解決のテーマは、次の8章でより詳しく解説されます。

今日の箇所で、教えられなければならないのは、「**クリスチャンにとって、絶望は絶望ではない。**」ということです。クリスチャンでも、このパウロのように、絶望することもあるのです。しかし、その絶望は、希望の入口なのです。クリスチャンにとって**絶望は希望の入口**だとしるべきだということなのです。

なぜなら、キリストが十字架について下さり、この絶望的に希望がない私のかわりに十字架で死んで下さり、復活をしてくださったからです。復活をして、私たちにイエス様の命をわけてくださった、永遠の命に生きる者にさせてくださったからです。



最後ですが、今は解散したようでしたが、J E C Aの逗子の教会に、ある音楽バンド（ポンコツ CATS：アマゾンで売っています・・・）がいました。かつての彼らの生き方を表すように、身体中に入れ墨がありました。教会には、彼らの活動のために使う、白い水玉の車に乗ってこられます。彼らが救われました。彼らはこう歌うのです。その題



は、「十字架ロック」。「やさしいあの子も、商店街のたばこ屋のおばちゃんも。立ち飲み屋でくだまくおっさんも。がたがたうるせえ学校の先生も。テレビで嘆くコメンテーターも。純粹、純情なアイドルも。おいらのおぎゃーと生まれたその日から、俺たち全員罪人なんですよ・・・ちょっとしたことで嘘ついちゃったり。あいつの成功、実はうらんだり。欲望の果てに家庭を壊したり。人様のものをパクってしまったり。ゼニール袋でスーハヤったり。ただの石の像を崇拜したり。アダムとイブの馬鹿野郎が、食っちゃいけない禁断の

実を食った！だけどオイラもそいつを食ってただろう。だから十字架背負って、ロックンロール・・・逃げ道なんてどこにもないさ。（イエス様を信じろ。）すべての罪は赦された。」まさにパウロの言っている事です。

今日。あらためて、私たちは、自分の弱さと限界と罪を思い出したのかもしれませんが。ある神学者（ダッハウ）は、過去の罪を覚えることが出来ない者は、必ずそれを繰り返す事へと定められていると言いましたが、自分に絶望することは良い事なのかも知れません。なぜなら、あなたには、キリストがおられるからです。

今週も、私たちも、パウロと同じように、自分の罪を示されながら絶望するような歩みであっても、主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。と言わせていただきながら、主にすべてをゆだね、赦され愛されている事を感謝し、その感謝を表していけるように歩む、この週でありたいと心から願います。